

Herman Melvilleの“The Happy Failure”と“The Fiddler”について

岡 村 仁 一

1. はじめに

Melvilleの短篇, “The Happy Failure”と“The Fiddler”は, Sealtsによると1853年の春から夏にかけて執筆されたもので, “Cock-A-Doodle-Do!”と並び, *Harper’s New Monthly Magazine*と*Putnam’s Monthly Magazine*の二誌に寄せられたMelvilleの15の短篇のうち, 最初期に執筆された“two other pieces”(227)だと推測されている。執筆時期から姉妹作品だと考えられるこの二作品は, またDillinghamによると

“The Happy Failure” and “The Fiddler” are so closely related in subject matter that critics have with good reason frequently linked them as companion pieces. (143)

「幸運な失敗」と「ヴァイオリン弾き」は主題の点で非常に密接に結びついているため, しばしば批評家たちによって姉妹作品として結びつけられてきたのも無理も無い話なのだ。

と内容面からの結びつきを指摘している。さらにDillinghamはこの二つの短篇の主人公に対して以下の様に言う。

Melville created protagonists who are diametrical opposites, an ordinary man who discovers happiness when he stops trying to be extraordinary and an extraordinary man who temporarily deceives himself into thinking that he can find the talismanic secret by being merely ordinary. (144)

Melvilleは, 非凡な人間になろうと試みることを止めたとき幸福を発見した平凡な男と, 一時的に自らを欺き, 単に平凡になることにより奥義を見いだすことが出来ると考える非凡な男という正反対の主人公を創造した。

ここで言及されている前者が“The Happy Failure”の「伯父さん」, 後者が“The Fiddler”のHelmstoneに相当する。本論ではこの二人の主人公を通し, *Pierre*の失敗を乗り越え, 短篇作家として再起を図る作者Melvilleの姿を見ていくこととする。

2. “The Happy Failure”

この物語の登場人物は語り手とその伯父, 更にはその伯父に仕える黒人の老人, Yorpyの三人である。物語は「ぼくは, 午前9時きっかりに川岸で初老の伯父と会う約束をしていた(The appointment was that I should meet my elderly uncle at the river-side, precisely at nine in the morning.)」(254)という書き出しで始まる。伯父が長年かけて発明した「素晴らしい機械(the wonderful apparatus)」(254)を召使いのYorpyとQuash Islandまで運ぶ手伝いを頼まれていたのだ。語り手は一見してその機械を「潰れた古い反物入れ箱に釘を打っただけのもの(nothing but a battered old dry-goods box, nailed up)」(254)で「なんてみすばらしくて艶も無い

古いゴミ入れなんだ(What a forlorn-looking, lack-lustre, old ash-box it is.)」(254)ととらえ、期待外れな外見から判断するに大した価値は無さそうだと見做す。ところが伯父は「そーっと、そーっと注意して入れろ(put it in carefully, carefully!)」(255)と命令を下し、この上なく価値あるものだという接し方をする。更にYorpyにとっては「十年もの長い間、疫病神だった(De pox has been my cuss for de ten long 'ear)」(255)のであり、自分に災難をもたらす厄介ものでしかない。

その上語り手はQuash Islandまで10 milesもボートを漕がされると聞き、「こんな炎天下に10 milesもボートを漕ぎ続けると知っていたら、みすみす乗り込まなかったのに(if I had known of this great long pull of ten mortal miles in this fiery sun, you wouldn't have juggled me into the skiff so easy.)」(255)と後悔の念を露わにし、無駄な努力はしたくないと伯父に訴える。そこで伯父はやっと「1時間に1 acreの割合でGenesseeの畑地以上に肥沃な耕作地を作り上げる沼沢地の排水を行うための、我が液圧応用液体静力学機(my Hydraulic-Hydrostatic Apparatus for draining swamps and marshes, and converting them, at the rate of one acre the hour, into fields more fertile than those of the Genessee)」(255)の説明を始める。冷静に考えるとこれは到底不可能なことなのだが、世間知らずの甥にはそのことが判らない。

更に伯父は「繰り返して言うが、もしこの誇り高い機械を遙か後世にまで語り継ぐのを分かち合いたくないというのなら、どうぞ勝手に陸に上がってくれ(if you care not, I repeat, to have this proud thing to tell—in far future days…you are free to land forthwith)」(255)とわざと語り手を突き放す態度に出る。それに対し語り手は「ぼくを騙して伯父さんの栄誉からぼくの分を取り除こうったって、そうはいかないんだから(You shall not cheat me out of my share of your glory.)」(256)と、栄誉を得られるなら如何なる努力も惜しまないとこれまでの態度を豹変させる。

いよいよQuash Islandに向けてボートを漕ぎ出す一行。「伯父さん、このボート漕ぎもなかなか骨の折れる、きつい仕事だね(This is a rather severe, hot pull, dear uncle.)」(256)という語り手に対し、伯父は「いいか若造、栄光というものは、懸命に漕ぎ続けなければ獲得できんものなのさ。わしらが今やっているように、流れに逆らって漕ぐのが肝心のさ。人間の生まれながらの傾向ってのは、普遍の流れとともに下り、忘却の中に沈んでいくことにあるのだからな(Glory is not to be gained, youngster, without pulling hard for it—against the stream, too, as we do now. The natural tendency of man, in the mass, is to go down with the universal current into oblivion.)」(256)と、栄光を得るためには懸命な努力が必要であり、人間、楽をしたいもののだが、楽をしていては何も得られず無駄に一生を終えてしまうと語り手を諭す。

「でも、どうしてこの場合そんな遠くまで漕がなければいけないの、伯父さん?(But why pull so far, dear uncle, upon the present occasion?)」(256)という語り手の問いに対し、伯父は「10年もの年月を費やしたこの高邁かつ弛まぬ努力の成果を性悪なスパイに盗みとられて欲しいと思うかね(would you have some malignant spy steal from me the fruits of ten long years of high-hearted, persevering endeavor?)」(256)と答え、「もし秘密裡に発明に成功すれば、その公表とともにどんな多額の金でも思い通り要求できるってわけさ(if I succeed, secure in the secrecy of my invention, I can boldly demand any price for its publication.)」(256)とこの発明の目的が世のため、人のためというより私利私欲が第一である旨を明かす。

更に「こういっては失礼だけど、伯父さん、ぼくより賢いね(Pardon me, dear uncle; you are wiser than I.)」(257)と言う語り手に対し、伯父は「年をとり、白髪が増えてくれば、自然と知恵がついてくるものさ(One would think years and gray hairs should bring wisdom, boy.)」(257)と答え、「伯父さん、あそこのYorpyの胡麻塩頭も年の功で立派な脳味噌が入っていると思う?(Yorpy there, dear uncle; think you his grizzled locks thatch a brain improved by long life?)」(257)と甥から訊かれると「わしとYorpyを一緒にするな。気をつけろ!(Am I Yorpy, boy? Keep to your oar!)」(257)と伯父は差別発言をする。

やがてQuash Islandに到着すると伯父は「反対側の川岸に果樹園があるが、あそこの木の上にザアカイのように座っている奴、あれは男の子じゃないか?(Ain't that a boy, sitting like Zaccheus in yonder tree of the orchard on the other bank?)」(257)と警戒心を露わにする。語り手が「伯父さん、果樹園は見えるけど、男の子の姿なんて全然見えないけど(Dear uncle, I see the orchard, but I can't see any boy.)」(257)と否定しても伯父は「あいつはスパイだ。きっとそうに違いない(He's a spy—I know he is)」(257)と警戒心を緩めない。漸く実体が掴めた語り手が「男の子っていうのはただの枯れて白くなった木の枝だよ。もうはっきりよく見え

るもの(the boy is only a withered white bough. I see it very plainly now.)」(257)と指摘して初めて伯父は警戒心を緩めるのである。ここでいちじく桑の木に登ってイエスを見ようとしたルカ伝第19章に出てくる強欲な取税人、ザアカイを作者が喩えに用いた意図は、自分の欲が深いと相手も強欲に見えてしまい冷静な判断ができなくなっている伯父の姿を象徴的に描くと同時に、もう一つにはイエスの奇跡と同等の奇跡を自分の機械がこれから起こすと期待して自惚れている伯父の姿を滑稽に描く効果がある。更にこの段階では未だ不明ではあるが、イエスと出会うことによって悔い改め、救われるザアカイは、後に悔い改める伯父を予兆している。

そしてついに語り手はYorpyと機械をかついで、浅瀬から上陸して、実験場所に到着する。伯父は実験の準備を始めるが、「Yorpy!…おまえは右手の茂みの後ろに回り、見張りをしろ。人影が見えたら軽く口笛を吹け。若造、おまえは同じことを左手に回ってやれ(Yorpy…go you off to the right, behind the bushes, and keep watch. If you see any one coming, whistle softly. Youngster, you do the same to the left.)」(258)と再び警戒心を露わにする。

実験の準備が整い、二人は呼び戻される。

I peeped in, and saw a surprising multiplicity of convoluted metal pipes and syringes of all sorts and varieties, all sizes and calibres, inextricably interwreathed together in one gigantic coil. It looked like a huge nest of anacondas and adders. (258)

僕は箱の中を覗き込んだ。中には、ありとあらゆる種類の、またありとあらゆる大きさ、太さの渦巻き状の管や筒が驚くほど幾重にも、複雑怪奇に組み合わさっていて、巨大なとぐろを巻いていた。それは巨大なアナコンダやクサリヘビの巣の様に見えた。

ここで語り手は如何にも凄そうな機械の内部を目のあたりにし、実験が成功することへの期待感を高めつつ、少なくとも伯父の10年間の努力は本物であることを確信する。

いよいよ、実験を始めるにあたり、伯父は

Oh boy…oh boy! this, this is the hour which for ten long years has, in the prospect, sustained me through all my pains-taking obscurity. Fame will be the sweeter because it comes at the last; the truer, because it comes to an old man like me, not to a boy like you. Sustainer! I glorify Thee. (258)

ああ、まったくもって、苦節十年、将来を期して骨身を惜しまずに頑張ってきたというのも、ひとえにこの一時のためだった。名声というものは、最後の最後になってから、やってくるからこそ、一層美しく、お前のような若者ではなく、わしのような年寄りのもとにやって来るからこそ、いっそう真実のものになるのさ。われを支えしものよ。汝に栄光を授けん。

と感懐を述べる。伯父のことばには、長年の努力に支えられているからこそ、成功したときの名声には価値があるという実感が窺われている。その様子を見ていた語り手の顔から「雨のような雫(something like a shower-drop)」(258)がぱとりと浅瀬に落ちる。ここでの語り手は、実験の成否以前に、長年頑張ってきた伯父を尊敬し、その努力に敬意を払っているのである。物語の開始時点では楽をして成果を得たがっていた語り手に変化が現れている。

ついに実験は開始されるが、どうも思ったような成果が得られず、伯父の顔に少なからぬ困惑と苛立ちが見られる。これは何を物語っているのか？伯父は自分の願望と現実との落差に困惑し、苛立っているのである。この期に及んで伯父は「Yorpy, お前のその黒い蹄を箱の下からどかせ(You, Yorpy, take your black hoof from under the box!)」(259)と、Yorpyを疫病神扱いし、失敗をYorpyのせいになしよとしている。その一方語り手は「この伯父の癡癡が事態をいっそう疑わしく、かつ暗くして見せた。これは悪い兆候だと思った(This gust of passion on the part of my uncle made the matter seem still more dubious and dark. It was a bad symptom, I thought.)」(259)と事態を冷静に分析している。「もうほんのちょっぴりだけ！きっとできるはずだ！(Surely you can tip it just a *leetle* more!)」(259)と伯父は二人に命じるが、「きっとできるはずだ」ということばの裏には、

自分には才能があるという幻想を失いたく無い伯父の気持ちが隠されている。

どんなに手を尽くしても思い通りの結果を得られないと知り、「こんなくそ忌々しい箱など、どうにでもなれ! (Blast and blister the cursed box then!)」(259)と怒鳴った伯父は、「それから箱全体を掴んで、中身のアナコンダやクサリヘビを抜き出しては、引き裂いたり、ねじったり右へ左へと水面に放り投げてしまう (Then seizing the whole box, he disemboweled it of all its anacondas and adders, and, tearing and wrenching them, flung them right and left over the water.)」(259)。

そんな伯父に対し、語り手は

Hold, hold, my dear, dear uncle!—do for heaven's sake desist. Don't destroy so, in one frantic moment, all your long calm years of devotion to one darling scheme. Hold, I conjure! (259)

伯父さん、抑えて、抑えて！お願いだからやめてください。たった一つの大事な計画に長年冷静に打ち込んできたというのに、束の間の癪癪で何もかも台無しにしてしまわないで。お願いだから我慢してくださいよ。

と諭し、伯父を宥める。ここでどうして語り手は実験が失敗だと判っていながら、無駄な実験を諦めないように伯父を励ましているのか？この段階では最早成功か失敗ではなく、努力の方がむしろ大切であると悟り、長年に亘る伯父の努力を無駄にしたくないと考えているからだ。「ハンマーとスパナがあるんだから、もう一度組みなおして、テストしてみたらどうですか。命あるかぎり、希望ありますよ (You have hammer and wrench; put it together again, and try it once more. While there is life there is hope)」(259)と再度挑戦することを促す語り手に対し、「今後は生きている限り、絶望あるのみだ (While there is life hereafter there is despair)」(259)と伯父は皮肉交じりに応じつつも、気を取り直して実験を再開するが、結果に変わりはない。

その後顔面蒼白となり、意識を失った伯父をボートに乗せ、語り手と Yorpy は無言のまま島を離れる。途中で意識を回復した伯父は「いいか、わしの忠告を肝に銘じておけ。ゆめゆめ発明をするなんて考えないことだ。ただし幸福の発明は別だが (Boy, take my advice, and never try to invent anything but—happiness)」(260)と語り手に言う。それから伯父は箱を取り戻すために島に引き返す様に頼む。箱を取り戻す目的について、「箱は上等の薪箱くらいにはなるだろう。それにこの Yorpy 爺のためにも、古鉄を売ればタバコ銭くらいにはなるだろう (It will make a good wood-box, boy. And faithful old Yorpy can sell the old iron for tobacco-money.)」(260)と伯父は明かしている。長年自分のことばかり考えていた伯父が、初めて自分に尽くしてくれた Yorpy の存在に気づくのである。伯父のこのことばを聞いた Yorpy は、

Dear massa! dear old massa! dat be very fust time in de te long 'ear yoo hab mention kindly old Yorpy. I tank yoo, dear old massa; I tank yoo so kindly. Yoo is yourself agin in de ten long 'ear. (260)

アア、旦那サマ、アリガテエ旦那サマ、コノ長エ十年間、旦那サマガ Yorpy ニ優シイ言葉ヲ掛ケテ下サッタノハコレガ初メテデサア。アリガテエ、旦那サマ、十年トイウ長エ年月ガ経ッテ本当ノ旦那サマニ戻ッテ下サッタジャ。

と言い、10年間欲の亡者になって自分を見失っていた伯父が漸く真実に目を向けてくれたことを喜ぶ。

Yorpy の言葉を受け、最後に伯父は以下の様に語っている。

"Ay, long ears enough," sighed my uncle; "Esopian ears. But it's all over now. Boy, I'm glad I've failed. I say, boy, failure has made a good old man of me. It was horrible at first, but I'm glad I've failed. Praise be to God for the failure!" (260)

「ほんとうに長いトシツキだった」と伯父は溜息を漏らした。「イソップ物語の様なトシツキだった。しかしこれで万事終わったのだ。なあ、わしは失敗したことをうれしく思っているぞ。そうさ、言ってみれば失敗したおかげでやさしい老人になれたのだからな。最初は怖かったがなあ。しかし失敗してよかったのさ。失敗の神に栄光あれ！ってことだな。」

ここで伯父は「最初は怖かった」と明かしているが、一体何が怖かったのか？それは自分に都合のよい自分勝手な自分像を捨てて、真の自分に目を向けること、自分が劣っていることを素直に認めることなのだ。

一方語り手はこの体験を通し、次のように述べ、この物語を締めくくっている。

If the event made my uncle a good old man, as he called it, it made me a wise young one. Example did for me the work of experience. (261)

もしこの一件で伯父が自分で言うように心やさしい老人になったとすれば、ほくもこのことのおかげで、賢明な若者になることができたのだ。良き手本を通して貴重な体験を積めたのだから。

この物語からは、失敗を認めることでいろいろ見えてくるものがある、という事が覗える。伯父がこれまで追い求めていたものは、こうあって欲しいと思う願望の姿なのであり、それは自分には才能があり、Yorpyは自分より劣った存在であるというものであった。ところが、実験に失敗し、それを受け入れることにより、伯父の前に現れたのは真実の姿、即ち自分には才能など無いということであり、またそんな自分を見捨てず常に近くにいてくれるYorpyの姿であった。またそんな伯父を見ているうちに語り手が悟ったのは、成功か失敗かが大切なのではないということであり、その裏に潜む努力の価値に寧ろ注目すべきだということであった。人は成功か失敗か、ばかりではなく、その裏の努力もちゃんと見ていてくれるものだということが、語り手がこの体験を通して知ったことなのである。

3. “The Fiddler”

この物語は売れっ子詩人であったHelmstoneが自らの詩を批評家たちの酷評によって台無しにされ、不滅の名声とは無縁の存在になってしまったところから始まる。自分の作品を徹底的に否定された主人公は堪らずBroadwayに飛び出す。通りは有名な道化師で評判のサーカスへと殺到する群衆で満ちあふれている。そこでHelmstoneはばったり友人のStandardに遭遇する。「まあこれはまたどうしたんだね？人殺しをしてきたのではあるまいな！(Ah! what's the matter? Haven't been committing murder?)(262)」というStandardに対し、語り手であるHelmstoneは「それじゃ君も見ただろう？(You have seen it, then?)(262)」と自分の詩の批評のことを指して尋ねる。ところがStandardは「見たさ。朝の公演に行ったよ。あの道化師は大したもんだよ(Oh yes; I was there at the morning performance. Great clown, I assure you.)(262)」と、おそらくHelmstoneが批評の事を言っていると知りながら、見た対象をサーカスの道化師へと巧みに逸らしている。自分のことで頭が一杯のHelmstoneに対し、StandardはHelmstoneの目を一歩離れた外の世界に向けてやろうとしているのである。そのために、Standardはそこに丁度やってきた自らの友人、HautboyをHelmstoneに紹介する。HelmstoneはなぜかこのHautboyに気を引かれる。Hautboyは「あの道化師は天下無類だとかで、もっぱらの評判だ(The clown is inimitable, they say.)(262)」と二人をサーカスに誘い、更に「サーカスが終わったら、テイラーの店で上等のシチューとパンチといこうじゃないか！(and circus over, we'll take a nice stew and punch at Taylor's.)(262)」と明るく呼びかける。

そこで三人はサーカスに向かう。Helmstoneは自分の目で道化師に対する世間の評価を確かめようとすると同時に初対面のHautboyを観察することにする。評判の道化師のジョークを心の底から楽しむHautboyに対し、Helmstoneはこの道化師の一体何がおもしろいのか、全く理解出来ず、自分のすばらしい詩は評価されなかったのに陳腐な道化芝居が評価されることにに対する嫉妬心や正しい評価を下せない世間を軽蔑する気持ちを露わにする。更に道化芝居を見て喜びはしゃぐHautboyの様子は逆に「自分の狭量な誇り(my intolerant pride)(263)」をあざけているかのように感じ、陳腐な演技を世間共々心から受容できるHautboyは今の自分にはないものを持っている、と道化師よりむしろHautboyに興味を向けることとなる。

サーカスの後、三人はテイラーの店へ行き、実際シチューとパンチを賞味することになる。Hautboyの様子を観察していたHelmstoneはHautboyの中で「良識と陽気さが仲良く手を取り合っている(Good sense and good humor in him joined hands.)(264)」ことに気付く。「Hautboyは多岐にわたる話題について見解を述

べる際そのほとんどが、話に夢中になりすぎず、逆に無関心にもならず、その中間の線を直感的に嗅ぎ当てていく (In most of his remarks upon a variety of topics Hautboy seemed intuitively to hit the exact line between enthusiasm and apathy.) (264) 人物で、「世間をあるがままの姿で見つめ、勝手に理屈をこねて明るい面に傾倒したり、反対に暗い面だけを取り上げたりはしない (It was plain that while Hautboy saw the world pretty much as it was, yet he did not theoretically espouse its bright side nor its dark side.)」(264) ことに Helmstone は気がついている。ところが Hautboy が席を外している間、Standard から Hautboy についての感想を聞かれた Helmstone は素直に Hautboy を評価することが出来ず、自分にはないものを持つ Hautboy を嫉妬し、意地悪な評価を試みる。つまり Hautboy は「天才的な才能に恵まれなかったからこそ永久に祝福されている (Unpossessed of genius, Hautboy is eternally blessed.)」(265) というのである。そして「君がお薦めの Hautboy は結局君にとっても僕にとってもお手本にも教訓にもならないよ。せいぜい並みの才能の持ち主にすぎない。限界があるから明晰な意見が持て、情熱に乏しいから情熱を抑えておくことができ、そのように生まれついたから陽気な気質なのだ (your cheery Hautboy, after all, is no pattern, no lesson for you and me. With average abilities; opinions clear, because circumscribed; passions docile, because they are feeble; a temper hilarious, because he was born to it.)」(265) と結論づけている。

そんな Hautboy に対して、Standard は Master Betty の話を持ち出す。Master Betty とは 12 歳のイギリス人の役者で、周りから天才の神童と呼ばれていた人物である。なぜ Standard は Master Betty の話を持ち出したのであろうか。それは Hautboy の正体を明かしてしまう代わりに、ここで似た経歴を持つ Master Betty を採り上げ、そこから Helmstone 自らが Hautboy の正体を類推して欲しいという Standard の戦略であったと思われる。ところが Helmstone は「彼 (Standard) が二人の間の話題を解く合鍵をこっそり用意しているらしい (He seemed to be holding the master-key of our theme in mysterious reserve)」(265) ことには気付きつつも、これまで通りの考えに固執し、発想の転換を図ることができない。それを悟った Standard は「報われぬ功績、無視された才能、撥ね付けられて萎えてしまった傲慢さ (neglected merit, genius ignored, or impotent presumption rebuked)」(266) といったものに Hautboy は何らの貴重な教訓も与えてくれない人物だと考えているのか、Helmstone に確認を取る。Standard が言っている三つのものはまさに Helmstone のことを指している表現なのであるが、そのことに Helmstone は気がつかない。

やがて席を外していた Hautboy が戻ってくる。Hautboy は二人を自分の部屋へと誘う。ここで Standard は「ヴァイオリンを弾いてくれるという約束をしてくれたら、お付き合いしてもいいですよ (If you will promise to fiddle for us, we will.)」(266) と、その誘いに応じるための条件を出す。

Hautboy の部屋に入ると、ひとつひとつ旧式の家財道具の競売で買い求めたらしい、あらゆる種類の変った家具が奇妙な具合に並べられているのに Helmstone は気付き、「しかも全て感心するほどに磨かれており、気持ちが良い (But all was charmingly clean and cosy.)」(266) と Helmstone は感じる。このあたりから既に中古の家具でも手入れを怠らない Hautboy の日頃の姿勢が覗え、それが彼のヴァイオリンの演奏にも通じているであろうことが匂わされている。

Standard にせがまれ、Hautboy は「疵だらけの古いヴァイオリン (his dented old fiddle)」(266) を「高い背なしのガタガタ椅子 (a tall rickety stool)」(266) に腰掛けて演奏する。それを耳にした Helmstone は「ありふれた曲だったが弾き方が超絶的で、はくは完全に魅せられてしまった (But common as were the tunes, I was transfixed by something miraculously superior in the style.)」(266) と言い、「はくの気難しい不満やいらだちは跡形も無く消え失せてしまった。不機嫌な男の魂はその魔法の様なヴァイオリンに完全に降参してしまったのだ (All my moody discontent, every vestige of peevishness fled. My whole splenetic soul capitulated to the magical fiddle.)」(266) と感想を述べる。こうして自ら Hautboy の演奏を聴くことにより、Helmstone の Hautboy に対する印象・考えは 180 度転換する。

そして Hautboy の部屋からの帰り道、主人公は Standard に Hautboy とは何者なのか教えて欲しいと懸命に頼み込む。それに対して Standard は次のように答える。

Why, haven't you seen him? And didn't you yourself lay his whole anatomy open on the marble slab at Taylor's? What more can you possibly learn? Doubtless your own masterly insight has already put you in

possession of all. (267)

なんだって？いましがた会ってきたはかりじゃないか。それにきみは、テイラーの店で大理石のテーブルの上で彼を全部解剖してみせたではないか？それ以上の何が分かるというのかね？きみ自身の優れた洞察力によって、君はなにもかも手にし尽くしているはずだよ。」

StandardはこれまでHelmstoneが散々披瀝してきたHautboyへの洞察が間違っていたこと、つまりHelmstoneの洞察力が少しも優れていないことをここできちんと確認した上でHautboyの正体を明かす。Hautboyは「少年時代にありとあらゆる栄光を味わいつくした途方もない天才(an extraordinary genius who in boyhood drained the whole flagon of glory)」(267)であったが「今日、彼がブロードウェイを歩いていても誰一人としてそれを知るものはいない(But to-day he walks Broadway and no man knows him.)」(267)のが現状であるという。そして更に次の説明を加える。

He who has a hundred times been crowned with laurels, now wears, as you see, a bunged beaver. Once fortune poured showers of gold into his lap, as showers of laurel leaves upon his brow. To-day, from house to house he hies, teaching fiddling for a living. Crammed once with fame, he is now hilarious without it. With genius and without fame, he is happier than a king. More a prodigy now than ever. (267)

かつては何百回と栄光の月桂冠を授けられた男が今はよれよれのビーバー帽を被っている。かつては額に月桂樹の葉が降り注ぐと同時に富が黄金の雨のように膝に転がり込んできたものだが、今は生きていくためにヴァイオリンを教えながら家から家へと飛び回っている。かつては名声を無理やり詰め込まれたが今は名声がなくとも、大いに楽しくやっている。天才あれども名声なし。しかし王様よりも幸福だ。昔以上の神童というわけさ。

この後、HelmstoneがHautboyの本名を尋ねると、Standardは耳元でこっそり教えてくれる。それはHelmstoneが既知の名で、しかも子どもの頃、実際劇場で彼の実演を聴いてもいたのである。StandardがHautboyの本名を最初に明かさなかった理由は、世間の評価を鵜呑みにするのではなく、実際に演奏を聴かせてHelmstone自身に評価させるためであったと考えられる。

翌日Helmstoneは自分の書いた原稿をすべて引きちぎり、ヴァイオリンを買い求め、Hautboyのもとでレッスンを受けるために出かける。この行為の意味するところは、ここでの原稿は周囲の評価に必要以上にこだわり、他人に対して否定的であった今までのHelmstone自身を表し、その原稿を引きちぎるということは周囲に認められず落ち込んでいたHelmstoneが全てをリセットしてこれからまた出直そうという気持ちの表れであると考えられる。Hautboyから受けるレッスンはヴァイオリンそのものを習おうというのではなく、古い家具やヴァイオリンでも神業的に使いこなす、ありふれた題材でも技巧を凝らして見事に仕上げるHautboyの生き様を学ぼうということであろう。

4. 結 び

作品“The Happy Failure”が作者Melvilleにとって短篇作家として再起を期した作品の一つであったとすれば、ここで言う「幸運な失敗」は執筆の前年、1852年に出版された大作 *Pierre* の失敗ということになる。ただし見方によっては、作品 *Pierre* は“The Happy Failure”の語り手の伯父の実験が完全に失敗し、発明品が最終的に「良い薪箱(a good wood-box)」や「古鉄(the old iron)」(260)に成り下がったのとは異なり、内容面では満足していたにもかかわらず、ものを見る目の無い世間の評価が得られず、販売面で失敗したという事に過ぎない。しかしこれは職業作家としては大問題で、生きていく上では嫌が応にも世間の評価というもののから目を逸らすわけにはいかない。そのことを思い起こさせてくれたとすれば「幸運な失敗」であったと言えよう。

一方、作品“The Fiddler”の世界を作者自らが置かれた状況と重ね合わせてみると、自己の価値観・評価と世間の価値観・評価にズレが生じたとき、どうやって生きていくのか？という問題に至る様に思える。

Hautboyも世間の評価が得られず、Helmstoneと同じように落ち込み、ひねくれてしまった時期があったかもしれない。しかし彼はそれを乗り越え、今では陽気に振る舞い、幸福を得ている。これは挫折を経験したときに参考にすべき一つの生き方を示しているのではないのか。楽器や曲が問題なのでは無く、Hautboyのその弾き方がHelmstoneの心をとらえた様に、文学作品とて同じこと、題材が重厚長大でなく、ありふれていようと、作品中で言われていた様な「何か超絶的な技巧(something miraculously superior in the style)」(266)を目指すべきなのだ。そのためにも、自分が評価されないとき、それに対し、腹を立てたり、否定的になるのではなく、現実を直視し、自らを客観視し、狭量な判断に陥っていないか反省すべきである、と主人公のHelmstoneは作者Melvilleの立場を代弁している様にも思える。この先短篇作家として生きていく上での心構えを示しているとも言えよう。

Works Cited

Dillingham, William B. *Melville's Short Fiction: 1853-1856*. Athens: Univ. of Georgia Press, 1977.

Melville, Herman. "The Fiddler." In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. Vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986, 262-267.

---. "The Happy Failure—A Story of the River Hudson." In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. 254-261.

Sealts, Merton M., Jr. *Pursuing Melville 1940-1980*. The Univ. of Wisconsin Press, 1982.

『聖書』 日本聖書協会, 1982年.